

現地素材を生かした授業実践

— 原住民アートを生かした鑑賞教育について —

前台北日本人学校 教諭

大阪市立長橋小学校 教諭 兼 本 千絵子

キーワード：現地理解，台湾原住民，現地素材の教材化，図画工作科，鑑賞教育

1. はじめに

台北日本人学校は、台北市内にあり、学校の周辺にはアメリカンスクールやヨーロッパンスクールなどもある国際色豊かなところに立地する。そのため学校の行事はもちろんのこと、課外活動などでも、他国の在外教育施設と交流する機会が多い。また台湾の現地校とは、交流会・一日交換留学なども行っている。台湾の現地校には、さまざまな地域から児童・生徒が集まり、台北日本人学校が交流を行っていた士東國小や天母國小にも、さまざまな国籍をもつ児童が就学していた。

台北市内は、都会化されており、交通の便もよく、生活に便利な場所である。しかしそんな台北市から一步離れると、まるで台北市内とは違ったのどかな田園風景が広がっているところもある。日本人学校の児童・生徒は、主に学校の近辺に居住している。そのため、原住民^(注)の方を街中で見るとはよくあるものの、その歴史や文化、芸術について触れる機会はあまりない。台湾の東側に位置する花蓮縣や台東縣は、今でも自然がたくさん残り、原住民の方々が独自の伝統文化を受け継ぎながら生活している。その地域を訪れる中で、原住民の伝統工芸に見られる芸術の素晴らしさに魅了された。そしてその芸術を、縁あって台北日本人学校で学習している子どもたちにも紹介したいと考え、鑑賞学習を行うことにした。

2. 台湾原住民について

台湾には、漢民族と原住民が98対2の割合で住んでいる。漢民族は比較的都市部に多く住み、原住民は、台湾南部や東部の山間部に住んでいることが多い。原住民は、現在14族が台湾政府より認定されている。14族は独自の言葉や文化、芸術をもっている。日本統治時代、中華民国時代と、さまざまな時代を経る過程で、原住民は独自の文化を失ってきた。若い世代では、自分の民族の伝統的な機織りができなかつたり、狩りなどの生活に必要なことができなかつたりと、その文化の消失は激しい。文化の消失とともに、新たな問題が出てきた。今までは、自給自足の生活を送ってきた原住民の人々が、金銭を稼がなくてはいけなくなったことだ。両親ともに台北や高雄といった大都市に出稼ぎに行くため、子どもは村で祖父や祖母と1年を過ごすということもよくある。年に一度、旧正月にだけ家族が揃う。それでも生活は貧しく、行きたくても高校や大学にいけないことも多い。そこで近年、政府は国を挙げて、原住民の保護に乗り出している。

まず、政府に認可された原住民族には、補助金が下りる。その補助金を、自分たちの文化や芸術などを保護することに使う。私が訪問した台東縣では、村の中に橋を作り、その橋一面に原住民の絵を描いたり、壺を飾ったりしていた。伝統的な儀式を行う家屋を建てている民族もあった。

女性は、民族伝統の機織りや、工芸品作りを学ぶ。学校などの公共施設を利用して、年配の方が指導する。ある一定のスキルが身に着くと、民族の模様などを巧妙に取り入れたカバンや衣服、ターバンなどを作り、都市部などで売る。そうすることで、少ないけれども一定の収入を得ることができる。また、こうした技術を身につけることによって、母親は大都市に出稼ぎに行かなくても、村に留まり、子どもの世話をそばでできるようになるとのことだ。民族の伝統を守る意味でも、家庭を守る意味でも大切なスキルだそうだ。

進学などにも、配慮がなされている。高校・大学などの進学時には、原住民が、自分の原住民族語能力検定に合格している場合は、一律35%、検定に合格していない原住民籍の子どもには一律25%の点数が加算される。

こうすることによって、漢民族の子どもたちとの教育の不均衡をなくし、原住民の子どもたちにも、教育の機会を与えている。また原住民籍の子どもは、大学を卒業するまで国から補助金が出るため、授業料を払う必要がない。ただし、両親のうちどちらかが原住民以外であると、原住民籍は認められなくなってしまうようだ。

上に紹介したことは、もちろん施策の一部であるが、さまざまな観点から原住民の方々の、原住民文化の保護、育成がなされている。そんな原住民の文化であるからこそ、台湾に住む日本人学校の子どもたちも、それを学ぶ価値があると考えた。

3. 実践事例

2年生図画工作科題材『見て見て何がみえるかな?』

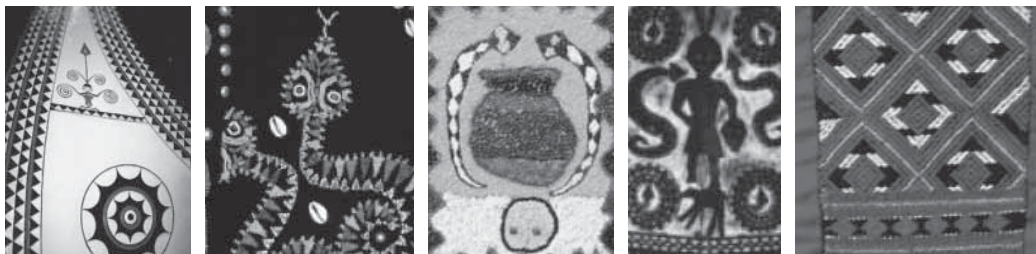
① 第1時 (鑑賞)

まず、子どもたちに一枚の写真を見せた。(写真A) 原住民が漁の時に乗る船であるが、あえてマークが描かれている部分のみを拡大して提示した。そしてその絵をみて気がついたこと、思ったことを発表することから授業に入った。「目のような模様があるね。」「人が、上の方にいるよ。」「赤・白・黒三色しか使われていないよ。」「三角形や丸、半円など、同じような形が続けて描かれているね。」子どもたちの視点は、まさに原住民アートの的をえたものであった。子どもたちは、たくさん意見を発表した後、一体この全体がどうなっているのか気になって仕方がない様子であった。そこで、全体の写真を見せると、「やっぱり船だったのか。」「この船、原住民のものかな。旅行で見たよ。」と言う児童がいる半面、「原住民って何ですか。」と質問する児童もいた。

次に同時に3枚の写真を見せた。(写真B①②③) どの写真にも蛇の模様が入っているが、蛇が描かれているものは、布・石版・砂と材質の異なるものである。今度は、気がついたこと、思ったことを班で考える活動を行った。「この3枚は、きつとつながりのある物語だよ。」「真ん中の写真は、蛇が壺を守っているみたい。」「右の写真の人は、足が鳥のようにになっているな。」などの意見が出た。この写真は、パイワン族という民族のものである。パイワン族は、民族誕生の由来から蛇を民族の象徴としている。

最後に幾何学的な模様の一部を提示し、全体を想像して絵に描く活動を行った。(写真C) 帽子のようなものを描く児童、のれんを描く児童などさまざまであった。3度に分けて部分から全体に近づくような写真提示をする中で、子どもたちの想像も変化していった。これは、原住民の男性のズボンに使われている模様である。

この1時間の鑑賞学習を通して、原住民や原住民アートに興味を持った子どもが多くいた。また台湾に住んでいながら原住民とは何かということを知らなかった子どもにとって、それを知る良い機会となった。



写真A

写真B-①

写真B-②

写真B-③

写真C

②第2時 (つくる)

原住民アートには、第1時で紹介したような民族の模様=象徴が必ず作品に入っている。その模様を見るだけで、どの民族のものかすぐわかる。原住民の模様は、あるものを抽象化していたり、単純化されたものの中に美しさ

が感じられたりするのが特徴である。子どもたちにとってもわかりやすいので、興味をもって活動できた。そこで、原住民族と同じように、『自分を象徴するマークを作ってみよう』という活動を行った。「このマークをみると、〇〇さんだ!とわかるようなマークを描いてみましょう。」と提案すると、実に凝った作品が多数出来上がった。



「わらいのきのこ」



「ピアノのせかい」

「わらいのきのこ」

作者：わたしは、人を わらわせたり、あかるくしたりすることが とくいです。わたしの そばに いる人は、わたしの 顔 を 見るだけで けらけらとわらいだします。だから わたしは、見ているだけで わらいだしそうな マークを 考えました。きのこにも はねを つけたりして しっぽのような ものも つけてみました。

「ピアノのせかい」

作者：音楽が だいすきです。いつも わたしの そばには 音楽が あります。しぜんも 大すきです。夜空の 星や月を 見るのも 大すきです。大すきなものを わたしの マークに しました。

子どもたちの表現したものは、とても奥が深く、「わらいのきのこ」に見られるように喜怒哀楽といった目に見えないものを形にした作品もたくさんあった。また、前時に鑑賞した原住民の模様の特徴である、『同じものの繰り返し』や『赤・黄・黒の3色にこだわ

た作品』も見られた。この後、お互いに作品を見合い、絵に込められた思いを想像する活動を行った。

鑑賞教育は、一つの見方だけではなく、同じものを見る側によって、幾通りにも解釈することができるように素晴らしさがあると私は考える。原住民の芸術を通して、台湾の文化に触れられたとともに、鑑賞の楽しさに触れたことにも大きな意味があった。

4. 終わりに

台北で教壇に立つ機会をいただき、3年間生活する中で、旅行ではわからなかった台湾の魅力をたくさん知ることができた。この小さな島からは考えられないほどの人々のパワーを3年間常に感じてきた。日本統治時代には日本となり、日本が敗戦した後は中華民国下の統治となり、常に生活スタイル、そして母国語を変えてきた台湾。年代によって話す言葉が違うということを目の当たりにしたときには、大きなショックを受けたとともに、日本が昔、台湾を統治していたころの様子をたくさん知りたいと考えた。そして辿り着いたのは、原住民の住む村であった。台東の原住民『パイワン族』の人々は、統治時代の日本人のことを、「とても親切でよかった。」とおっしゃっていた。異国の地で、自分の生まれ故郷の歴史を知ることとは、何とも不思議な気持ちにさせられる体験であった。同時に大きな喜びでもあった。良い面・悪い面、両方があるにせよ、台湾という地に日本が刻んだ歴史は、あまりにも大きいと肌で感じた。台東の海岸できれいな水平線を眺めた時には、「70年前ここにいた日本人は、原住民の方々とともに生活する中で、この景色を見ながら、どんなことを考えていたのだろう。」と思った。まるで、自分が70年前にタイムスリップしたような気持ちで、いっぱいになった。

これからも多くの日本人に台湾について知ってほしいし、いつまでも友好関係を保ってほしい。図画工作科を通じた原住民の学習が、児童の心のどこかに刻まれ、台湾の素晴らしさの一つとして残っていくことを切に願っている。

〈注〉

台湾における「原住民」という呼称には、その方々に対する尊敬の意が込められている。かつて、多くの原住民が山間部に住んでいたため、「山間部に住む人」という偏見的な呼び方が使われていたことがあった。そこで、台湾に昔から住んでいた人々という尊敬の意を込めた「原住民」という呼称が広く使われるようになった。本授業実践では、その歴史的経緯を踏まえた上で、あえて「先住民」ではなく「原住民」という言葉を使い、表記することとした。